

William Richey Hogg,

New Day Dawning

(World Horizons Book, 156 Fifth Ave., New York 10, N. Y., 1957, pp. 101.)

著者は、過去に於て I.M.C. の本部に於て主事輔佐として勤務した後、一九五〇―五五年の間、インドのジェヴァプールのメソヂスト関係のレオナルド神学校に於て、教会史、世界教会学等を教え、宣教師としての経験を終えた後に、サザン・メソヂスト大学の世界教会学担当教授として迎えられた新進の学者である。筆者が同大学に学んだ最初の年に新任教授として着任され、筆者は同教授の世界教会学特講、セミナー、概論等に出席し、個人的にも深い交りを持つ機会を与えられた。筆者がダラスを去ってニューヨークに出発する前夜、教授の宅に招かれて、出発前夜のあわただしい一時を楽しく過した忘れ難い思い出を持っているが、本書の原稿は実にその日の朝、完成したものであって、筆者はその様な個人的理由からも深い感銘を覚えつつ本書を読んだ。著者はまだ三十六才の若さであるが、既に 'Ecumenical Foundation, 1954.' を出版し、更に、教会史では米国の最高権威者であるエール大学、ユニオン神学校教授の K. S. Latourette と共同で "Tomorrow is Here," や "World Christian Community in Action," 等を世に問うて

書 評

いる。

本書は、米国ではエキュメニカル・ムーブメント（世界教会運動）に於て最も進歩的な長老派教会（正確には Presbyterian Church in the United States of America であつて）長老派にも他に極めて保守的な色彩の濃い教派がある事は記憶されねばならない。が、一九五六年にニューヨーク近郊のモホンク湖畔 (Lake Mohonk) で開催した協議会の席上、メソヂスト教会に属する著者に、特に依頼した事から著述されるに至ったものである。従つて、本書の内容は、幾つかの世界教会々議 (W.C.C.) や国際宣教会議 (I.M.C.) に出席して得た教授自身の豊富な体験より生み出された思想と、長老教会の有する外国伝道政策とが巧みに盛り込まれたものである。本書は世界教会学の専門的学者を対象として書かれたものではなく、伝道者、並びに一般信徒を主たる対象として書かれた啓蒙的なものである。

著者は、従来、宣教師を送る教会と、それを受ける教会と云う関係に於て理解されて来た、Older Church と Younger Church との関係が、現代では全く新しい観点に立つて再検討され、両者の関係が根本的に改変されなければならぬ事を一貫して、力強く主張している。序文に於て、教授は端的に次の如く述べている。"This little book is written against the background of two features of our age: the dawning

of a new day in the world and the dawning of a new day in the Church...”この教授の言葉によって、読者は本書の書名が意味する所を明確に把握され得るであろう。

ホッグ教授は、モホンク湖畔の協議会に於て、南朝鮮の教会代表が、京城の神学校に学んでいる五百名の朝鮮人神学生達が如何なる海外及び国内からの奨学金をも受けずして、全く自給で学び、且つ教会奉仕を行つてゐる現状と、経済的には形容し難い困難な情勢の下にある南朝鮮のキリスト者達が、タイ国その他のアジアの国々に若干の朝鮮人宣教師を送つてゐる現状とを紹介して、此処にこそ、将来の世界教会の有るべき姿が見出されると述べている。(筆者は昨年九月、バンコックに於て、その朝鮮人宣教師の一人に会い、語る折を得たが、彼は自分の宣教師運動の一つとして、バンコック在住の日本人達に対する伝道を計画している事を筆者に語った。)教授は、新時代の下に於ける宣教師運動は、この様な「エキュメニカル・ミッション」でなければならぬ事を強調している。

更に、著者は、従来ともすればエキュメニカルなる言葉が、世界教会の間の教会合同 (Unity) を叫ぶ為に好んで使用せられて来た傾向を指摘して、我々が教会の本質的な宣教師の使命と、エキュメニカルなる言葉の真の意味とを併せて考察する時、「エキュメニカル・ムーヴメント」なるものは、「教会合同」(Unity) に対する絶えざる努力と、宣教師の為に従来 of 観念を超えた、新

らしい「エキュメニカル・ミッション」とを平行して強力に推進する時に、始めて正しく理解され、実践せられるものであると力説している。北部長老派教会が率先して missionary と云う名称を廃止して、之に代る fraternal worker なる名称を採用するに至つたのも、実にこの様な思想より出ている。教授は、更に、従来 of 宣教師を送る立場としての Older Church と云う観念は、最早や新時代の下では適當ではなく、米国の如くキリスト教国と見做されている国々に対して、所謂 Younger Church と呼ばれている国々から、反つて fraternal worker が送られねばならぬ事実を大胆に指摘している。勿論、この主張は教授によって始めて提唱されるに至つたと云う性質のものではないが、北米諸教会の伝道者、一般信徒を主たる対象としている本書に於て、この点を終始一貫して主張する事は相當の反響と批判とを覚悟せねばならぬものである。

教授は、更に、日本基督教団に於て、按手礼を受けた婦人正教師が数多く教会にたずさわつてゐる事実が、協議会に出席した世界教会代表者を驚嘆させた点にも言及して、今後の教団の発展と、世界教会運動に於ける貢献とを切望している。これらの他にも、教授は、海外伝道活動の為に、新しい立場から、伝道者や神学教師の如き人材の交流や、又、エキュメニカル・ミッションの立場から従来 of 海外伝道資金の新らしい使用方法等も積極的に実行されねばならぬ事をすすめている。

筆者は、右に、本書に於けるホッグ教授の強調点を若干紹介したに過ぎない。従来ともすれば、日本のキリスト者は、眼を広くアジア或いは世界に向けて、世界的観点から日本教会の使命を考える事をしなかつた。更に、又、世界のキリスト者が何を問題としているかに就ても、関心が薄かつた。本書は、その様な我々の狭い視野を大きく拡大してくれるのみではなく、日本のキリスト教会、日本のキリスト者が、世界教会運動の中に於て、如何に大きな期待を以て見られ、現実に活動の道が与えられようとしつつあるかを教えている。本書を読了するならば、世界教会運動の真只中に於て、新しい、輝やかしい使命と責任とが、読者自身にも負わせられて居る事を悟つて、非常な希望を与えられると共に、今や世界の教会が、新しい関係の下に再組織されて、「エキユメニカル・ミッション」(世界教會的伝道)の為にその偉大な活動の歯車を回転し始めている事を、直接に感じ取る事が出来るであらう。

小林 栄

Werner Jentsch,

Urchristliches Erziehungsgedanken

(Gütersloh: Bertelsmann, 1951. 302 Seiten.)

著者は、ドイツ福音主義教会における青少年教育部門の指導者の一人であり、またYMCAの欧州委員会のメンバーとして

書 評

活躍している人である。実際のな教育活動の場に仕事をもって
いる人であるが、学問的にも、故アルブレヒト・エプケ教授の
高弟として、自己の課題の聖書的基础づけを、豊かな知識と優
れた洞察とをもって遂行する力量をそなえている人でもある。
著者は、一九三〇年前後より試みられた「福音主義的教育学」
die evangelische Pädagogikの確立をめざす諸労作を顧みて、
それらの組織的考察の強さが必ずしも聖書的研究の保証によつ
て支えられているとはいえないことを遺憾とし、新約聖書の歴
史的研究を通して、新しい教育概念の探求のために、一つの寄
与を志すのである。

ところで、われわれの間におけるキリスト教教育、教会教育
の位置づけは、宣教する教会の機能という関心のもとに、宣教
もしくは伝道との対照、関聯において考察される傾向が強い。
もちろん、このことは正しいことであるが、このような関心が
固定された恰好でその聖書的基础づけを問うとき、それは、ド
ッドによつて提起されたケーリユグマ・ケーリユッセインとデ
イダケー・デイダスケインの定式をめぐる吟味、検討という観
点からなされる。しかし「デイダケー」が教育という概念を全
面的におおうものであるかは問題がある。デイダケーはむしろ、
ケーリユグマとの「有機的」または「密接な」繋りを外し
ては考えられないのであつて(たとえば、田島信之・新約聖書
における宣教と教え——「基督教論集」第五号、遠藤彰・キリ